

〈小学校 総合的な学習の時間〉

ふるさとを想い、豊かに生きる児童の育成

～地域素材をいかし、学びのプロセスを組み込んだ探究活動を通して～

宮古島市立伊良部島小学校 教諭 安里 あきの

I テーマ設定の理由

近年、人工知能(AI)やInternet of things(IoT)等の先端技術が高度化し、社会は著しい変化を遂げている。サイバー空間とフィジカル空間を融合させた、Society_5.0の移行が進むなど、激しく変化し予測困難な現代社会においては、子供たちが多様な変化に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力が必要である。情報を再構築し、新たな価値を創造する力を育むことが学校教育に期待されている。

『小学校学習指導要領総合的な学習の時間編』(以下、『解説総合編』)では、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。」と示されている。児童が多様な他者との協働を原動力とし、学んだことを自己の在り方・生き方と結び付け自分の成長を自覚し、豊かに生きる力を身に付けるためには、学校や家庭、地域社会全体で教育活動を展開していくことが求められている。

本校では、小中一貫教育の特色をいかし、地域とつながる教育活動の実践を大切にしている。児童は、地域への愛情が深く、サンバ保護やサンゴ保全活動といった地域の自然を守る活動に取り組む一方、活動が形式化・恒例化しているため、活動に対する目的意識や課題を自分事として捉えることができないという実態がある。

これまでの授業実践を振り返ると、3つの課題があげられる。1つ目は総合的な学習の時間において、教師主導の情報伝達に重きが置かれ、児童が自ら問いを立てて探究を深める学習へと十分につなげることができなかったことである。2つ目は、地域の伝統行事や歴史背景等の地域素材を教材化する研究が不足しており、児童の「知りたい」という切実な願いを引き出すまでには至らなかったことである。3つ目は体験で得た気付きや実感を次なる探究へと結び付けることができなかったことである。

これらの課題から、本研究では第4学年の「地域を知ろう」の単元において、地域素材をいかした学習活動の充実に取り組む。探究活動における「学びのプロセス」を通じて、学んだことを自己と結び付け、自分の成長を自覚し、自己の生き方を考えることにつなげていきたい。さらに、学んだことを振り返り、発信する過程を通して、自分事として捉えることを大切にしたい。

児童が、ふるさとのよさや課題を自分事として捉え、当事者意識を持って行動することで学習の有用性を実感できるようにする。他者との協働を通じた自己実現の経験から、「未来を拓く力」の育成へつなげていきたい。この力は、将来の自立に向けた確かな基盤となり、ふるさとを想い、豊かに生きる力の育成につながると考え、本テーマを設定した。

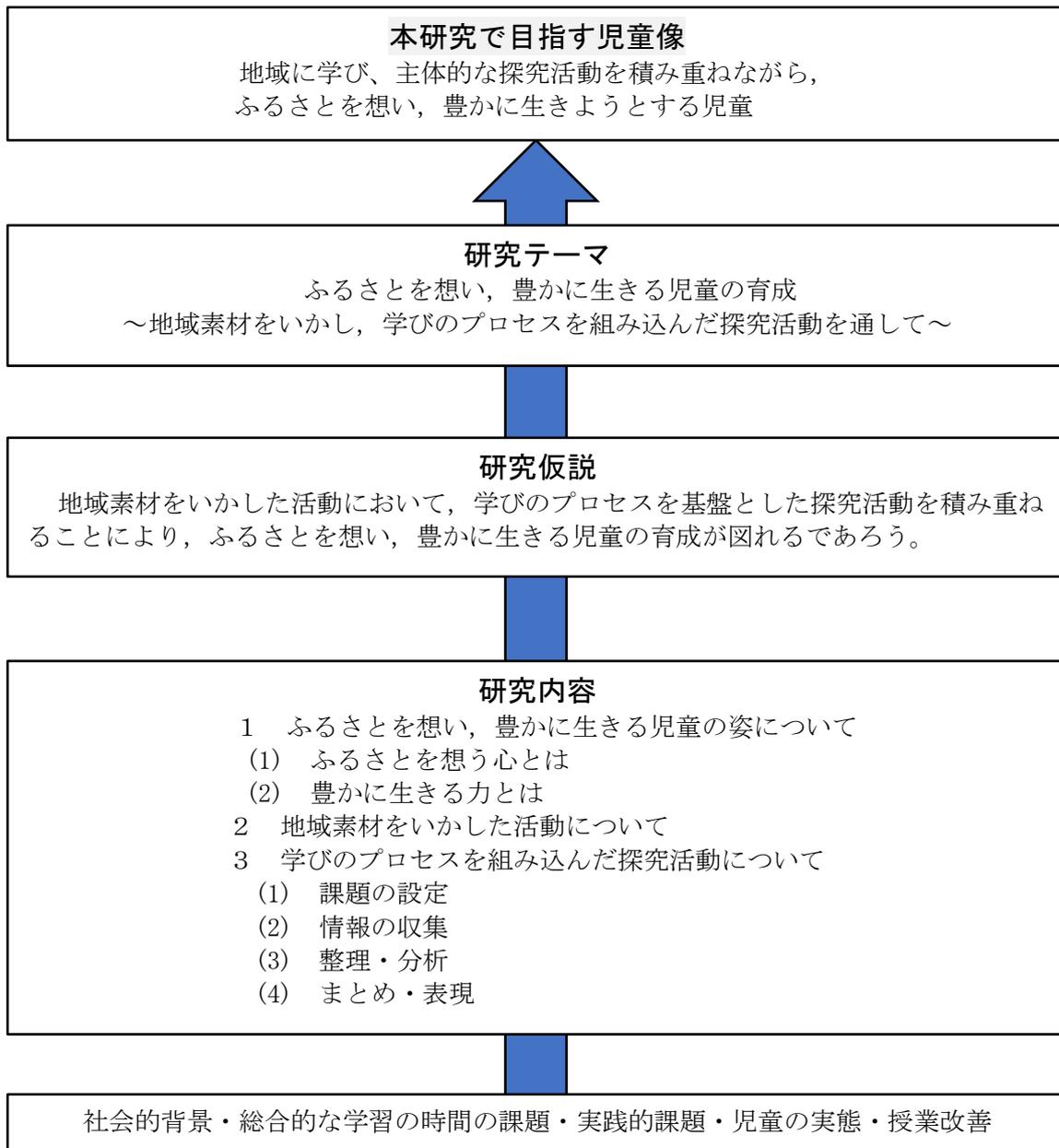
II 研究目的

本研究は、地域素材をいかした体験的学習を核とし、学びのプロセスを意図的に組み込んだ探究活動を通して、ふるさとや地域への愛着と、未来を豊かに生きる児童を育成することを目的とする。

III 研究仮説

地域素材をいかした体験活動において、学びのプロセスを基盤とした探究活動を積み重ねることにより、ふるさとを想い、豊かに生きる児童の育成が図れるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

本研究では、研究テーマ「ふるさとを想い、豊かに生きる児童の育成」を推し進めていくために、以下の点を基に、研究を進めていく。

1 ふるさとを想い、豊かに生きる児童の姿について

(1) ふるさとを想う心とは

『解説総合編』では、総合的な学習の時間の目標を「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」と示している。児童が実社会や実生活に根ざした課題に主体的に関わり、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった探究の過程を通して学びを深めることが重視されている。また、『小学校学習指導要領総則編（平成29年告示）』においては、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に基づく資質・能力の育成が求められている。これらは相互に関連しながら働き、学習の過程において具体的な児童の姿として現れるものである（図1）。

本研究では、地域を主題とした探究的な学習を通して、児童が地域の自然や歴史、文化、人々の営みなどについて

理解を深めるとともに、地域との関わりを実感し、自らの生活とのつながりを見いだしていく姿に着目し、学習を進めていく。調査活動や体験活動、地域の人々との交流を通して得た気付きや実感は、学習への主体的な態度を支え、学びをさらに深める原動力となる。児童が、探究の成果を発信する活動を通して、自らの学びを自分事として捉える過程こそが、社会の形成に関わろうとする態度の育成につながるものと考えられる。

本実践では、児童が地域よさや課題を自分との関わりの中で捉え、「自分事」として経験を重ねることを重視する。体験や対話を通して得た学びを振り返ることにより、児童は自らを地域社会の一員として自覚し、自己と社会とのつながりを実感する。このような学びの積み重ねは、「自己の生き方を考える」ことへと接続し、将来にわたり社会に主体的に参画しようとする基盤づくりとなる。児童が、探究の成果を発信したり、自分たちにできる行動を検討したりする過程こそが、社会の形成に関わろうとする態度を実効的なものへと高めていく。

以上を踏まえ、本研究における「ふるさとを想う心」とは、総合的な学習の時間における探究的な学びを通して育成される地域への理解を基盤とし、地域との関わりを実感しながら、社会の形成に主体的に関わろうとする姿として捉える。「ふるさとを想う心」の育成が、自己と他者、社会との関係性の中でよりよく生きようとする「豊かに生きる力」の形成へとつながるものと位置付け、研究を進めていく。

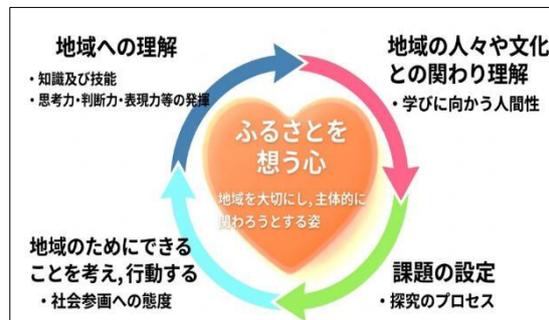


図1 学習課程における具体的な児童の姿

(2) 豊かに生きる力とは

「豊かに生きる力」とは、単に知識や技能を身に付けることにとどまらず、自己と他者、社会や自然との関係性の中で自らの在り方を問い直しながら、よりよい未来を主体的に創造していく総合的な力を指す。これは、知・徳・体の調和のとれた成長を基盤としつつ、変化の激しい社会においても自律的に判断し、協働的に課題を解決していく資質・能力を包含する概念である。「豊かさ」とは、物質的充足のみを意味するものではない。自己の成長を実感できること、他者とのつながりの中で役割を果たしているという有用感や自己効力感をもつことや地域や社会の一員として参画しているという実感を得ることで見いだされる。本研究における「豊かに

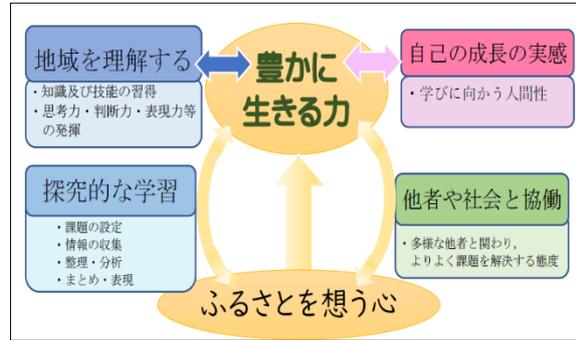


図2 豊かに生きる力の育成イメージ

生きる力の育成」とは、児童一人一人が自己の可能性を自覚し、他者と共によりよく生きようとする態度を育む教育実践の過程そのものを指すものである(図2)。

『解説総合編』では、「総合的な学習の時間に育成する資質・能力については、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくため」と示され、総合的な学習の時間における資質・能力は、探究活動を解決するためのものであり、自己の生き方を考えることにつながるものでなければならない。各学校では、目標を実現する地域や学校の特色に応じた課題、伝統や文化、環境などに関わる課題を取り上げ、体験的・協働的な学習を展開することが重要である。

こうした理念を具体的な学習場面における児童の発言や行動、振り返りの記述を通して捉える。地域文化を色濃く残す伊良部島を題材とし、観光客の増加に伴うごみ問題や環境への影響を取り上げ、社会科の学習と関連付けながら発展的に扱う。児童が伊良部島の伝統行事や自然環境のよさに触れるとともに、観光振興による地域活性化の側面とごみの増加や環境問題といった課題の双方に向き合う学習を構成する。

以上のことから、本研究では「豊かに生きる力」を、地域を理解する学び、他者や社会とつながる学び、そして自己の成長を実感する学びが往還する中で育まれる総合的な力と捉える。その具体的な表れとして「ふるさとを想う心」を位置付ける。総合的な学習の時間における探究的な学びは、この両概念を結び付ける教育活動であると考え。地域の自然や歴史、文化、人々の営みに触れながら課題を設定し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を重ねる探究のプロセスを通して、地域との関わりの中で自己の可能性を見だし、他者と協働しながらよりよい社会の形成に関わろうとする児童の育成を目指し、研究を進めていく。

2 地域素材をいかした活動について

『解説総合編』では、「教材は、探究的な学習として質の高い学習活動が展開されるように、児童の学習を動機付けたり、方向付けたり、支えたりするものであることが望まれる。」と示している。児童が興味・関心を持ち、身の回りの日常生活や社会にある

のよさからふるさとの未来を創造し、地域の課題を模索する活動へつなげていく。地域素材をいかした体験活動としては、かつお加工工場見学を実施する。地域の特産品の製造に関わる方の地域への思いや願いも考えさせたい。伊良部島のよさから児童が探究したい課題を設定し、同じ課題等でグループを分け学習を進めていく。

(2) 情報の収集

『解説総合編』では、「課題の解決に向けては、自分で情報を集めることが欠かせない。自分で、何が解決に役立つかを見通し、足を運んだり、情報の手段を意図的・計画的に用いたり、他者とのコミュニケーションを通したりして情報を集めることが重要である。」と示されている。

本研究では、児童が設定した課題に基づき、聞き取り調査や文献調査、ICTを活用するなど、多角的な方法を用いて情報を収集する。特に、家族や地域の人々へのインタビューを通して、多様な立場や思いに触れる機会を設ける。収集した情報の蓄積には、A4ノートを活用し、情報の整理や二次利用を効率的に進められるようにする。その際、教師は「誰の視点による情報か」「事実と意見はどう異なるか」といった観点を示し、児童が主体的に情報を選択・活用し、課題を多面的に捉え、解決していく力の育成へとつなげていく。

(3) 整理・分析

『解説総合編』では、「収集した情報を比較・分類・関連付けることにより、情報の整理を行う。」と示されている。

本研究では、収集した情報を共通点や相違点、原因と結果、時間的経過などの多角的な観点から整理し、図や表、シンキングツール等を用いて情報の構造化を可視化する。児童が、対話を通して、互いの収集した事実を関連付け、再構成する過程を通して、断片的な情報から事象の背景や新たな意味を見だし、課題に対する自分たちなりの答えを導き出していく姿を目指す。教師は、「なぜそう言えるのか」という問いや、「伊良部島の未来にどうつながるのか」といった仮説的な揺さぶりをかけることで、客観的な根拠に基づき、論理的に考察する力を高めていく。

(4) まとめ・表現

『解説総合編』では、まとめ・表現の学習において「情報の整理・分析を行った後、児童の既存の経験や知識と、学習活動により整理・分析された情報とがつながり、一人一人の児童の考えが明らかになったり、課題がより一層鮮明になったり、新たな課題が生まれたりしてくる。」と示されている。

本研究では、整理・分析した内容を基に、ポスターの作成や地域への提言など、相手や目的に応じた発信に取り組む。児童が、「成果どう伝えるか」「自分たちに何ができるか」を真剣に検討する過程こそが、学びを自己の生き方と結ぶ付け、社会を創り出そうとする実践的な態度を養う要となる。その際、各教科で培った表現方法を横断的に活用し、「人・もの・こと」の視点を重視することで、探究の質をさらに高めていく。さらに、発信に対する地域の方々からの反応を基に、自己の学びをじっくりと振り返る場面を設定する。児童が、多様な考えに触れ、自分の考えを深め続ける経験を通して、「自分たちにできること」を実感させたい。こうした実感が、ふるさとをよりよくしたいという願いを育み、次なる探究への確かな意欲につながると考える。

VI 授業実践

1 単元名 「地域を知ろう」

探究課題「地域の文化探検」(伝統文化・工場見学)

2 単元の目標

伊良部島の人々の活動や環境課題について、地域の方々や専門家との対話を通して探究する。収集した情報を思考ツールで整理・分析し、「なぜ必要か」「未来にどうつながるのか」という視点から自分たちなりの考えを形成し、分かりやすく発信する力を養う。これらの活動を通じ、地域の課題を自己との関わりにおいて捉え、ふるさとと共に豊かに生きようとする主体的な態度を育む。

【探究のサイクル 2】(考える・まとめる)

地域の課題を自己との関わりとして捉え、自分たちにできることは何か考え、発信しよう。

【探究のサイクル 3】(ふり返る・実行する)

探究の成果を振り返り、自分たちにできることを実行しよう。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①地域の課題は、自分たちの生活に深い関わりがあることに気づいている。	①地域の人・もの・こととの関わりから、問いを見つけ課題解決へ向けた計画を立てている。	①地域の課題に関心をもち、自分自身の生活を見つめ直すことができる。
②課題に対して、様々な取組が行われ、その努力や工夫について理解している。	②集めた情報を目的に合わせて思考ツール等を用いて整理・分析し、課題の解決策をまとめることができる。	②地域の課題から自己の生活を見つめ直し、より良い改善点を見い出そうとしている。
③地域の課題に対して、自分にもできることが分かり、その方法を身に付けている。	③伝えたい内容を、相手の反応を意識して、聞き手に分かりやすくまとめ、表現を工夫している。	③地域の人・もの・こととの関わりから、自分にできることを考え、行動に生かそうとしている。

4 指導の手立て

本単元では、本研究で目指す児童の育成を目指し、次のような手立てを行う。

	手立て
①	・地域や博物館の専門家との対話を充実させ、多くの知見に触れることで、既存の知識を再構築し、探究を深められるようにする。
②	・整理・分析のプロセスにおいては、Yチャート等の思考ツールを活用し、事実と意見を構造化させることで、客観的な根拠に基づいた対話を促す。
③	・ICT やステップシートを活用し、学びの記録を可視化する。学習で得た知識や価値観を自分の生活と関連づけ、自身の変容を自覚できるリフレクションを行う。
④	・多様な表現形式による報告会を設定し、地域社会への貢献を実感させる体験を積み重ねることで、次なる探究や生活改善への意欲を高める。

5 単元の指導計画（探究のサイクル2・3 全35時間）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
単元	地域を知ろう～ふるさと未来プロジェクト～											
	探究サイクル1(知る・調べる)⑮						サイクル2(考・ま)⑳			サイクル3(ふ・実)㉑		
	すいまーるプロジェクト⑩											

課：課題設定 情：情報の収集 整：整理・分析 ま：まとめ・表現

サイクル	(課題)時	探究	・児童の主な活動	○予想される児童の反応	評価 規準 ◎方法
2 (考える・まとめる)	1 問題	課	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの住む地域の問題点を知る。 地域の工場を見学する。(検証①) 目指す学びの姿を話し合う。 調べるテーマを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> 伊良部島のごみ問題 工場の歴史や未来 ごみの分別や処理 活動を想起する 	知① 思① 思② 主①
		情	<ul style="list-style-type: none"> ごみ問題から考える。(検証②) 家族や身近な人にインタビューをする 博物館見学で地域を知る。(検証③) 本やインターネットで情報を集める。 	<ul style="list-style-type: none"> 解決する取り組み 地域の必要性 事実の収集 	◎
		整	<ul style="list-style-type: none"> 集めた情報を整理・分析する。 伝える方法について考える。 グループごとに発表練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報を共有し整理する 誰にどのように伝える 	◎ 振り返り ノート 発言 発表
		ま	<ul style="list-style-type: none"> まとめたことを発表する。 新たな問いや課題に気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 地域のためにできることがわかった。 	
2 自分たちに できること	2	課	<ul style="list-style-type: none"> 新たな問いを基に、環境問題について自分たちにできることを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> できる取組があることに気づく。 	知① 知②
		情	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちができることを調べる。(学校・家庭・地域) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちには何ができるのか。どんな取組があるのか。 	思① 思②
		整	<ul style="list-style-type: none"> 地域の課題解決へ向け、自分たちにできることを伝え、考える。(検証④) サシバについて調べる(検証⑤ 情報の収集) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちができる活動や取組を考える。 	主②
		ま	<ul style="list-style-type: none"> 発信する方法を決めて、次の活動へとつなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域のためにできることがわかった。 	◎ 振り返り ノート 発言
3 (振り返る・実行)	3	情	<ul style="list-style-type: none"> 未来プロジェクトを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを成功させよう。 	知③ 思③
		整	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返り、よさや改善点を話し合い、整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの生活と関係づけて考える。 	主③
		ま	<ul style="list-style-type: none"> まとめたことをグループで対話する。 	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの成功を共に喜び合う。 	◎
		課	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを発信する。 次の学習へ向け、新たな問いや課題に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域のためにできることはないかな。 	◎ 振り返り ノート 発言 発表

6 検証授業

第1回 探究のサイクル1 (課題の設定) 【かつお加工工場見学】

本時の目標

「ふるさとの先輩から学ぶ!かつお工場の伝統や秘密を見つけよう！」

地域食材である「かつお」を無駄なく使い、加工するためにはどんな技術が使われているのかについて調べよう。

💡	○学習活動 T 教師 S 児童の反応	□留意点 ・他教科との関連 ☆評価規準【観点】(方法)
つかむ ⑤	1 見学の目的を再確認する。 2 ワークシートの「めあて」を読み、工場の伝統や技術を学ぶ意欲を高める。 ・工場で「どう作られているか」と、売店で「どう売られているか」の両方を見つけることを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> ・地域食材である「かつお」を無駄なく使い、加工するためにはどんな技術が使われているのかについて調べよう。 </div>	<input type="checkbox"/> 「つくる人」と「売る人」の両方が「ふるさとの先輩」であること意識させる。 <input type="checkbox"/> 衛生管理のため、マスクの着用など、マナーを徹底する。 ☆生産と販売の両面から地域産業を調べようとしている。 【主】 (発言・発表・態度・ワークシート)
見る・知る・深める ⑥	3 今日の学習の流れを確認する。 2 グループで見学 A : 売店→工場→全体でまとめ B : 工場→売店→全体でまとめ 【売店】 売店の「売る」を観察する。 ・どんな商品が並んでいるか、工場で見たいものがどうパッケージされているか見る。 ・お客さんはどんな人か(地元の人、観光客)を観察する。 【工場】 かつお加工工場の「つくる」を観察する。 ・ワークシートに沿って加工工程をメモする。 ・働く人の工夫(衛生や技術)を見つける。 4 インタビューをする。(売店と工場) ・売店の人には「売る時の工夫」を、工場の人には「作る苦勞」を、聞く。 ・事前に準備した質問を使う。 ・仕入れ先や天候不良時の場合など。 ・売店のおすすめなど	<input type="checkbox"/> 工場で作ったものが、すぐ隣で売られている良さ(新鮮・安心)に気づかせる。 <input type="checkbox"/> 売店のポップや並べ方の工夫を見つけさせる。 ☆売るための工夫や、お客さんの願いに合わせた商品作りにつづく。 【思・判・表】 (発言・発表・態度・ワークシート) <input type="checkbox"/> 売店に並ぶ前の商品の「製品の姿」をしっかり見せる。 ☆聞き取りを通して、生産から販売までの流れを理解する。 【知・技】 (発言・発表・態度・ワークシート)
まとめる ⑩	5 見学の振り返りとまとめをする。 ・振り返りの視点 ① 工場で一生涯命作ったものが、売店でお客さんに届く様子を見てどう思いましたか。 ② 10年後、20年後、この伝統が続いていくために今のあなたができることは何だと思いますか。	<input type="checkbox"/> 振り返りの視点を示す。 <input type="checkbox"/> 工場と売店が隣にあることで、地域の暮らしにどう役立っているか考えさせる。 <input type="checkbox"/> 当事者意識を高める言葉かけを行う。

第2回検証授業 探究のサイクル2 (情報の収集)

本時の目標

ビーチクリーンの活動から伊良部島の問題点について話し合い、地域の未来について考えることができる。

目	○学習活動 T 教師 S 児童の反応	□留意点 ☆評価規準【観点】(方法)
つ か む ⑤	<p>1 前時の振り返り T 前回の授業ではどんなことをしましたか。 S 目指す姿とテーマの確認をしました。</p> <p>2 本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> なぜ、伊良部島のごみが増えてきているのか考えよう </div> <p>・今日の学習の流れを確認する。</p>	<p>□留意点 ☆評価規準【観点】(方法)</p> <p>□児童の気付きから本時のめあてへつなげるようにする。</p>
さ ぐ る ③⑤	<p>3 活動を想起する。 T どの種類のごみがたくさんありましたか。 S ペットボトルやプラスチックのごみが多かった。</p> <p>4 自分たちの活動を振り返り、グループごとに整理していく。</p> <p>・社会科で学習したごみ処理との相違点について話し合う。 T 落ちているごみは最終的にどこへ行きますか。 S 海かな。川がないので。 T どうしてごみは減らないのでしょうか。</p> <p>5 世界中でプラスチックごみが問題になっていることを話し、自分の生活を振り返る。 T プラスチックを使わない生活はできますか。 S できないと思います。</p> <p>6 伊良部島の課題について考える。 T 伊良部島の未来のためにできることありますか。 S 海の守るための取組ができると思う。</p>	<p>□活動を想起させるための手立てを提示する。 (写真・振り返りなど)</p> <p>□買い物ゲームや副読本の資料を提示する。 □国語の学習と視点をつなげる。 □既習の活動を想起させることで、学びを振り返り、地域の課題を自己との関わりとして捉え直せるようにする。</p> <p>☆地域の課題に関心を持ち、自分自身の生活を見つめ直し、学習に取り組もうとしている。 【主】(発言・ノート) □まずは、自分たちでできることを考えていく。</p>
ま と め る ⑩	<p>7 本時の学習を振り返る。</p> <p>T 今日の学習の振り返りをタブレット入力します。 ・振り返りの視点</p> <p>①ビーチクリーンの活動から伊良部島の問題点について気づくことができたか。 ②地域の未来について、自分たちができる取組にか。</p> <p>8 次時の学習を考える。 T 次の活動はどんなことができますか。 S 課題を解決するための計画を立てたいです。</p>	<p>□振り返りの視点を示す。 □「なぜ」の背景にある知識を価値付ける。 □当事者意識を高める言葉かけを行う。 □リアルタイムで共有し、考えを広げ、深めていく時間をもつ。 □次時の学習内容の確認をする。</p>

第3回検証授業 探究のサイクル2 (情報の収集) 【宮古島市総合博物館見学・講話】

本時の目標

見学と講話を通して、伊良部島についての知識を深めることができる。

	<p>○学習活動 T教師 S児童の反応</p>	<p>□留意点 ・他教科との関連 ☆評価規準【観点】(方法)</p>
<p>つかむ⑤</p>	<p>1はじめのあいさつをする。 ・学芸員の方の名前をしっかりと記入し、敬意を持って接することを心がける事を確認する。 ・見学のめあてを確認する。</p>	<p>□伊良部島や宮古島のことを深く知るための見学であること意識させる。 □公共の施設を利用の確認を行い、マスクの着用など、マナーを徹底する。</p>
<p>・3人の学芸員の先生の講話を通して、伊良部島についての知識を深めよう。</p>		
<p>見学①④⑩ 見学②⑩ インタビュー⑮</p>	<p>2今日の学習の流れを確認する。 ・クラス(1組・2組)に分かれ、見学を行う。 A：自然→民俗→全体で三大事業 B：民俗→自然→全体で三大事業 3「自然」「民俗」のエリアをクラスごとに交代で見学する。 ・学芸員の先生から専門的な話を聞く。 ・「気付き・発見・おどろき」の視点でメモをとる。 ・昔の道具や生き物の標本を観察し、気付きを記録する。 4「三大事業」と地域課題の学習 ・水道、電気、港など、島の発展を支えた事業と中心となった人物についてまとめ紙芝居を見る。 5博物館での「ごみ問題」や「観光客」についての現状を聞き取る。 ・質問タイム 6見学のまとめとして、伊良部島の未来について話し合う。 ・2つの地区が、支え合ってきた歴史への気付きを話す。</p>	<p>□メモをとることに集中しすぎず、「実物を見る・話を聞く」時間を大切にさせる。 ☆今の暮らしとの比較から、形や材料について問いをもつことができる。【思・判・表】(発言・発表・態度・ワークシート) ☆伊良部島特有の自然や生活文化の名称や用途について理解できる。 【知・技】(発言・発表・態度・ワークシート) □先人の努力が今の自分たちの便利な生活にどうつながっているのか考えさせる。 □ごみ問題について質問することで、地域の課題について触れる機会とする。</p>
<p>まとめる⑤</p>	<p>7本時の学習をふり返る。 T今日の学習の振り返りを記入します。 ・振り返りの視点 ①講話をしっかりと聞くことができましたか。 ②伊良部島についての知識を深めることができましたか。 ・自己評価を行い、感謝を伝える。 ・地域のためにできることを発信する方法を考える。</p>	<p>□振り返りの視点を示す。 □「今とこれから」に視点を向け、学んだことをどういふか意識づける。 ☆「自分たちにできること」を具体的にイメージし、地域への愛着を高めている。 【主】(発言・発表・態度・ワークシート)</p>

第4回検証授業 探究のサイクル2(整理・分析)

本時の目標

地域の課題解決に向け、自分たちの役割や意義について、各グループの発表を通して考えることができる。

	○学習活動 T 教師 S 児童の反応	□留意点 ・他教科との関連 ☆評価規準【観点】(方法)
つかむ ⑤	1 前時の振り返りをする。 T 前時までに調べたことは何でしたか。 S 「学校・家庭・地域」でできることを調べました。 T 何のためにいろいろ調べてきたのでしょうか。 S 自分たちの島のこと。このままだと大変だから。 T 今の私たちができることは何だと思いますか。 2 本時のめあてを確認する。 「なぜやるの？」のわけを見つけて、伊良部島の未来のためにできることを考えよう。	□児童の気付きから本時のめあてへつなげるようにする。 □既習の活動を想起させることで、学びを振り返り、地域の課題を自己との関わりとして捉え直せるようにする。 □電子黒板の活用
発表・聞く ⑳ 考える ㉑	3 各グループの発表を聞く。 T 前時にまとめた表を使い、グループごとに発表してください。 S グループごとに発表する。(2分×8グループ) T 聞く視点に気をつけて聞きましょう。 ①どんな課題について考えていますか。 ②その行動は、なぜ大切だと思いますか。 4 自分たちにできることを考える。 ・Yチャートで整理する。 T グループの発表を聞いて、課題に対して、自分たちにはなかった発想はありましたか。 S Bグループさんの発表が気になりました。 T 学校・家庭・地域で「できそうだ」と思ったことは何ですか。 S ごみの分別やポイ捨てしないような声かけなど。 T 話し合う視点に気をつけて、伊良部島の未来のために、自分たちができそうだなと思うことをワークシートに記入しましょう。 ①なぜ、この取り組みが必要なのか。 ②なぜ、「自分たち」がやるのか。 ③続けると、伊良部島はどうなるのか。 S きれいな海や自然を守ることができると思います。	□発表シートを配布する。 □ワークシートを配布する。 □聞く視点を提示する。 □理由の言語化を促す。 ☆伝えたいことを、聞き手に合わせて分かりやすくまとめ、工夫、表現している。 【思・判・表】発表・ワークシート) □まずは、自分たちでできることを考えていく。 □思考ツールの活用 □正解ではなく、考えの根拠や価値を大切にすること。 ☆地域の人・もの・こととの関わりから、自分にできることを考え、行動に生かそうとしている。【主】(発言・振り返りシート)
まとめる ㉒	5 本時の学習をふり返る。 T 今日の学習の振り返りをタブレット入力します。 ・振り返りの視点 ①今日いちばん大切だと思った「なぜ」は何ですか。 ②伊良部島の未来のために、自分たちにできることは何ですか。 ○次時の学習を考える。 T 次の活動はどんなことができますか。 S 地域のためにできることを発信する方法について考える。	□振り返りの視点を示す。 □「なぜ」の背景にある知識を価値付ける。 □当事者意識を高める言葉かけを行う。 □リアルタイムで共有し、考えを広げ、深めていく時間をもつ。 □次時の学習内容の確認をする。

第5回検証授業 探究のサイクル2 (情報の収集) * 第4回検証後の情報の収集

本時の目標

地域の課題解決に向け、チャート図から見つけた新しい問いについて考えることができる。

目	○学習活動 T 教師 S 児童の反応	□留意点 ・他教科との関連 ☆評価規準【観点】(方法)
つ か む ⑤	1 本時のめあてと学習の流れを確認する。 ①前時に作成したチャート図を使い学習を想起する。 ②本時のめあてと学習の流れを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> めあて:「なぜやるの?」サシバを守るわけを考えよう。 </div>	<input type="checkbox"/> 留意点 ・他教科との関連 <input type="checkbox"/> 児童の気付きから本時のめあてへつなげるようにする。 <input type="checkbox"/> 既習の活動を想起させることで、学びを振り返り、地域の課題を自己との関わりとして捉え直せるようにする。 <input type="checkbox"/> 電子黒板の活用
集 め る ⑩ 整 理 す る ⑮ 考 え る ⑩	2 グループで話し合う。 ①各グループで「サシバ」についての情報を共有する。(下段記入) T「思考ツールはピラミッドチャートです。」 「下の段に、渡ってくる理由を記入します。」 3 各グループの発表を聞く。 ①下段に書いたこと発表する。 ②各グループの発表に対して、気付きや意見を発表する。 T「気づいたことはありませんか。」 S Kグループさんの発表が気になりました。 4 集めた情報を整理・分析する。(中段記入) T「共通点は何ですか。」 S「秋になると南へ移動する」 5 サシバを守ることが伊良部島の未来につながる理由を考える。(上段記入) T「なぜ、サシバを守るのでしょうか。」 S「絶滅危惧種だから。大切な生き物だから」 T「サシバを守るために、何に取り組む?」 S「ごみ拾いなど」 T「サシバを守ることが伊良部島の未来を守ることにつながりますね。」	<input type="checkbox"/> タブレットでチャート図を活用し、情報を整理する。 <input type="checkbox"/> 思考ツールの活用 <input type="checkbox"/> 理由の言語化を促す。 <input type="checkbox"/> 新しい発想に気づかせる。 ☆伝えたいことを、聞き手に合わせて分かりやすくまとめ、工夫、表現している。 【思・判・表】発表・ワークシート) <input type="checkbox"/> 収集した情報を共通点で分類する。 <input type="checkbox"/> まずは、自分たちでできることを考えていく。 <input type="checkbox"/> 正解ではなく、考えの根拠や価値を大切にする。 ☆集めた情報を目的に合わせて整理・分析し、課題の解決策をまとめることができる。
ま と め る ⑤	6 本時の学習を振り返り、次時の学習へつなげる・振り返りの視点 ①今日、いちばんのサシバの情報は何ですか。 ②サシバを守ることが伊良部島の未来につながるわけは何ですか。 ○次時の学習を確認する。 T 次の活動はどんなことができますか。 S 地域のためにできることを発信する方法について考える。	<input type="checkbox"/> 振り返りの視点を示す。 <input type="checkbox"/> 「いちばん」の背景にある知識を価値付ける。 <input type="checkbox"/> 当事者意識を高める言葉かけを行う。 <input type="checkbox"/> リアルタイムで共有し、児童の考えを広げ、深める時間をもつ。 <input type="checkbox"/> 次時の学習内容の確認をする。

Ⅶ 結果と考察

研究仮説に基づき、「地域素材をいかした体験活動」と「学びのプロセスを組み込んだ探究活動」を活用した授業づくりを通して、ふるさとを思い、豊かに生きる力を育むことに有効であったかを検証する。検証には、授業記録・児童のノート・検証前後のアンケート・見学シート・振り返り(スプレットシート、ノート等)の分析を基に行っていく。

1 地域素材をいかした体験活動

(1) かつお加工工場見学

工場の見学を通じ、児童の振り返りには、「まき(燃料)は木であることが分かった」といった素材への事実に気付きが多く見られ、体験を通して具体物への理解は深まった一方で、資源としての意味や地域課題との関連付けにまで認識が及んだ記述は限定的であり、実感を伴った学びを社会的な視点へと広げることにより課題が見られた。これは、第5回の検証授業における多角的な分析により解消へと向かった。

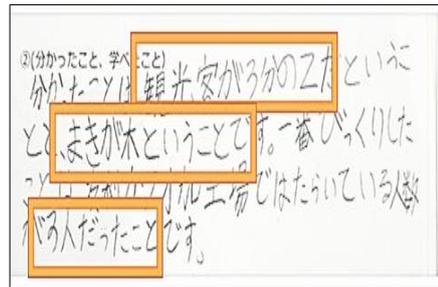


図4 児童の振り返り

また、児童は、今回の見学を行った加工工場については、インタビューを通じて後継者問題に関して解決していることを理解しているが、観光客の多さや地域産業全体の将来について言及する姿も見られた。地域素材に直接接触すると生まれた具体的な気付きが、地域の未来を考える視点へと発展しつつあることがうかがえる(図4)。

(2) 博物館見学・講話

博物館見学及び講話を通じ、児童は、伊良部島の地形的特性や地区ごとの歴史、行事や生業の違いを把握し、伊良部島の背景の多様性を理解することができた。特に、62年前の長い干ばつ時には、伊良部地区から佐良浜地区まで水桶を頭や肩にのせ、徒歩で運び、水不足を助け合い乗り越えたという歴史的事実に多くの児童が驚きを伴う深い関心を示した。また、三大事業の紙芝居を通じ、先人の苦労が現在の発展のつながっていることを、社会科との横断的な視点で捉え直すことができた。本活動は、地域素材を単なる知識の習得とせず、多様なルーツを持つ人々が協働で地域社会を創造してきた軌跡を追体験するものであり、地域課題を自己の生き方と関連づける活動として有効であった(図5)。



図5 見学・講話の様子

(3) ビーチクリーン活動

企業との協働によるビーチクリーン活動を実施した結果、児童の振り返りから、海岸のごみの多さだけでなく、海外からの漂着ごみの事実に着目した記述(図6)が見られた。

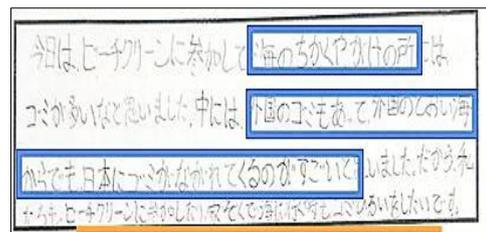


図6 児童の振り返り

児童は、遠方の海からごみが流れ着くことに驚き、海洋プラスチック問題の広がりを実感をもって再確認することができた。この気づきは、環境問題を外部の責任にするのではなく、自己の生活と結び付け捉え直すきっかけとなった。児童の「これからも参加したい」「海を守りたい」という意欲的な記述からは、社会参画への態度の基礎となる当事者意識の形成に深く結びついた。

(4) すいまーるプロジェクト・クリーンセンター見学・JA農業体験(野菜栽培)・環境教育出前講座(買い物ゲーム)

本実践では、すいまーるプロジェクトによる干潟の観察活動(図7)やクリーンセンター見学、買い物ゲーム、野菜の栽培・調理活動など、教科横断的な体験活動を軸に据えた。

児童は、島固有の水資源の循環システムや、ごみ処理のシステムといった「地域の持続可能性を支える目に見えない仕組み」をフィールドワークを通じて理解した。出前講座(買い物ゲーム)の振り返りには、「ごみをもやすのにもお金がかかる」という驚きや「ペットボトルはリサイクルするには金がたくさんかかる」という学びの記述が見られた。児童は、ごみ処理やリサイクルに多額の費用が必要であることを目の当たりにし、身近な事象を社会全体の仕組みの中で捉え直す多角的な視点へと探究が深まった。この経験により、生活基盤を維持する活動への関心が高まり、地域を支える仕組みの理解へとつながったものと推察する(図8)。

また、野菜栽培活動では、地域の営農指導員による専門的な植え付け指導を通じ、農産物を育てる工夫や地域に根ざした食循環を体験した。児童の振り返りには、「大根や人参の種がひもに入っていてびっくりした」「これからも野菜などを調べていきたい」という記述が見られた(図9)。種まきの活動における気付きは、日常で見かける野菜の背景にある生産者の意図や技術を捉え直す体験活動となった。

さらに、収穫した野菜と見学を行ったかつお工場のなまり節を使用し、カレー作りを行った。栽培活動から収穫、そして調理へと至る一連のプロセスは、児童の地域素材へ対する知的好奇心を大きく揺さぶり、地域を大切にしたいという学びの土台となった。児童が地域社会の一員としての自覚を育み、自らの手で未来を創ろうとする継続的な探求心へと発展していく有効な手立てであった。



図7 干潟の観察活動

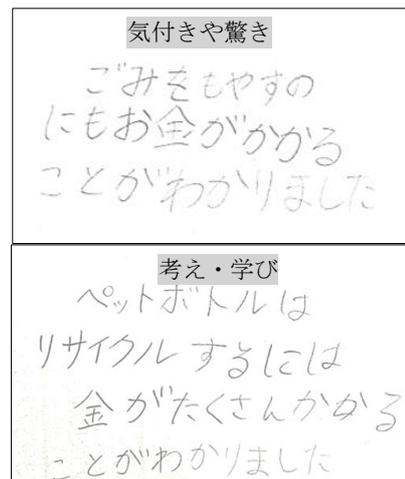


図8 買い物ゲームの振り返り

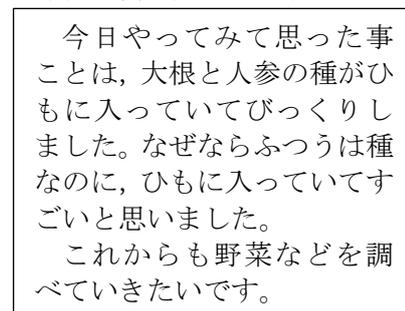


図9 野菜栽培活動児童の振り返り

(5) 検証授業(情報の収集)

検証授業では、ビーチクリーン活動の写真から体験を想起させた(図10)。児童は当初、伊良部島のごみ問題の主な要因は「観光客の増加」によるものと考えていた。しかし、「ごみの量と観光客数の変化」を示す統計グラフ(図11)を提示し、実態について、自己の生活経験(ビーチクリーン活動等)を基に、比較・検討を行った。その結果、観光客が減少した時期でもごみの量が一定数にあることや漂着ごみの実態から、要因は「私たちが出す生活ごみ」「他の地域や外国から流れてきたごみ」「観光客増加・クルーズ船」という3つの側面があることを理解できた。

また、グラフから得た気づきを基に、思考ツール(Yチャート)を活用して情報を分類した。これにより、地域の課題が3つの視点(図12)で整理された。児童は、内的要因のみならず、外的要因や経済活動という多様な要因で構成されていることを客観的に分析する姿が見られた。

授業後にある児童が、グラフを基に「ごみの量が加した原因は一つではない」と改めて確認に来た。その姿は、多面的な見方が根拠を伴う深い理解へとつながったことを示している。この客観的分析は、次なる活動を促し、クリーン活動主催企業の担当者への電話インタビューという直接的な情報収集へと発展した。地域の課題解決に協働する企業や、身近な存在である家族へのアンケート調査を通じ(図13)、児童は多様な立場から多様な視点に触れる記述が見られた。これらのプロセスは、地域課題を自分事と捉え直し、根拠を持って解決の糸口を探ろうとする当事者意識に支えられた探究の質の向上を裏付けることができた。

以上のことから、地域素材をいかした体験活動について児童の振り返りやノート

の記述から検証を行った結果、地域素材を教材化した体験活動において、児童が、自己の考えを再構築し、地域の課題を自己との関わりにおいて捉え直す活動に取り組むことができたと考える。児童が自ら問いを見だし、学びを深め、行動へとつなげるプロセスを意図的に組み込んだ本実践は、ふるさとを想い、豊かに生きる力を育む指導において、有効であった。



図10 検証授業における提示写真

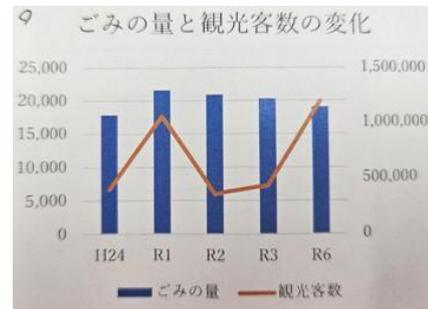


図11 提示した統計グラフ

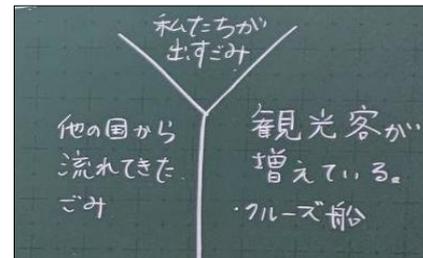


図12 3つの視点(Yチャート)

- ◎伊良部島のごみ問題について考えよう。
・インタビューできた人(家族・近所 ら母さん、おばあちゃん)
- ①家庭からでるごみの量は増えていますか。(はい) いいえ
理由 家族が多いから
- ②観光客は増えていると思いますか。(はい) いいえ
よさ 地域活性化(特産品が売れる)
- 問題点 ゴミがふえている。(Xにゴミが捨てられている)

図13 家庭へのアンケート

2 学びのプロセスを組み込んだ探究活動

本研究では、第4学年「地域を知ろう」において、文部科学省の『解説総合編』が示す「探究的な学習の姿」を参考に、全70時間の単元構想図(図14)を作成した。学びのプロセスを意図的に組み込み、これらが、発展的に繰り返される研究の過程を構築した。

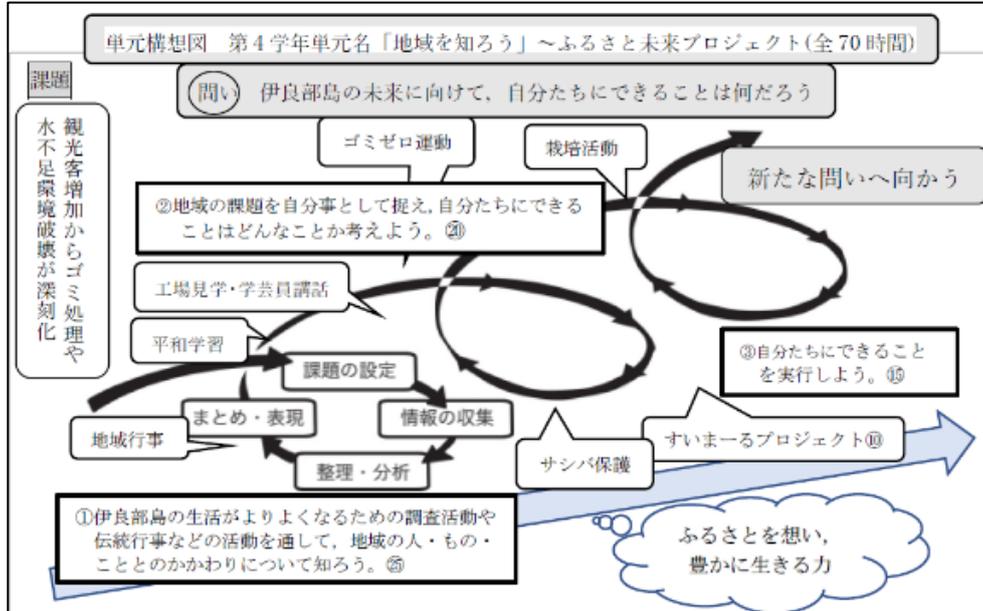


図14 文部科学省の探究的な学習における児童の学習の姿を参考にした単元構想図

(1) 課題の設定

本研究では、「伊良部島の未来に向けて、自分たちにはできることは何だろう」という問いを軸に、体験活動と文献等の資料学習との往還を通して地域課題を自分事として捉えさせる構成とした。問題解決的な学習過程を具現化したことにより、児童は一つの活動の振り返りから、新たな問いを見いだす姿を見せた。これは、体験活動を基盤として課題を見いだすプロセスが児童の知的好奇心を継続的に刺激した結果である。

(2) 情報の収集

本研究では、設定した課題に基づき、ICTの活用や文献調査、さらには家族や企業へのインタビューを通じ、地域の人々の多様な立場や思いに直接触れる機会を設けた。児童は、収集した情報を基に同心円チャートを活用し、「伊良部島のために自分たちができること」を学校、家庭、地域へと社会的な広がりを持って捉え直すことができた。また、整理・分析の授業後に生まれた「なぜサシバは宮古島に来るのか」という新たな問いに対して、ピラミッドチャートを活用し、収集した事実を構造的に整理した(図15)。

その結果、「サシバは愛知県、鹿児島県、沖縄県伊良部島で集合して、フィリピン

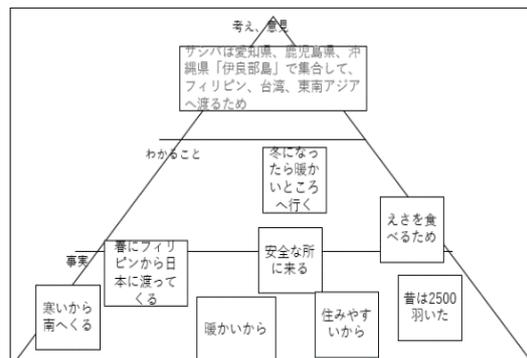


図15 ピラミッドチャートを用いた事実の整理

ン、台湾、東南アジアへ渡るため」という根拠に基づいた考察を導き出す姿が見られた。これらのプロセスを通じて、児童は、ふるさとを想う心を具体的な行動へと高め、よりよい社会を創り出そうとする意欲へとつなげることができた。

(3) 整理・分析

本研究では、前時までに収集した情報を基に、地域の課題である環境問題の解消へ向けて、「なぜ、この取り組みが必要なのか」「なぜ、自分たちがやるのか」「続けると伊良部島どうなるのか」の3つの視点で対話を行った。収集した情報はYチャートを用いて整理、分析を行った(図16)。特に、「ごみ拾い」「サシバ保護」「サンゴ保全」など、環境問題につながる視点が多く、地域素材をいかした体験活動の有効性を実感できた。児童が、グループ内の対話を通じ、環境保全と地域の未来を結び付けて考える姿を引き出したことは、総合的な学習の時間に

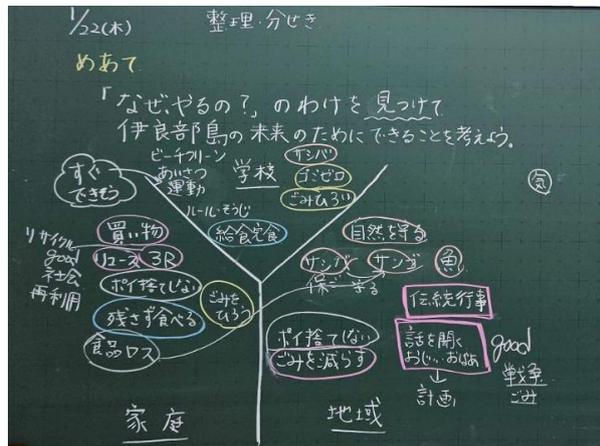


図16 Yチャートを用いた情報の整理・分析
 おける探究的な学びの本質に迫る大きな成果である。児童の思考は、学校・家庭・地域といった身近な生活レベルの気付きに留まらず、地域の自然環境と社会構造のつながりを多角的に理解するレベルへと深まり、広がりを見せた。

以上のことから、本研究における学びのプロセスを組み込んだ探究活動は、児童が地域の課題を自己との関わりにおいて捉え直し、論理的に解決策を導き出す力を育む上で有効であったと考える。

授業後のフィードバックでは、「サシバ」というキーワードが出た際、教師が「なぜ飛来するのか」という問いを事実に基づいて確かめることの重要性について助言を頂いた。ここに教材研究の真の意義があり、「海洋ごみ問題の深刻化が生態系に影響を及ぼし、サシバが伊良部島に飛来しなくなるかもしれない」という危機感は、児童が課題を自分事として捉える大きな契機になると考える。私自身の課題として、今後の教材研究の重要性を再確認する授業となった。本実践は、子供たちの「なぜやるのか」という本質的な問いを引き出すものであり、同時に、サシバや環境問題といった新たな探究課題を見いだす契機でもある。「小さなことの積み重ねが探究である」という言葉を支えに、探究のプロセスを重ねるたびに新たな問いが生まれる学習を、今後も追求していきたい。

(4) まとめ・表現

児童は、「伊良部島の未来のために自分たちができること」という大きな目的から具体的に何ができるかをピラミッドチャートで整理した。電子黒板を用いてオンタイムで全体共有を行うことで、他者の多様な視点に触れながら、「3R」「ボランティア」「ポスター」という三つの明確な方向性を焦点化した。これは、断片的であった情報が既存の知識とつながり、個々の考えが明らかになった結果と言える。

「3R」の活動では、牛乳パックを「資源」と捉え直し、かばん作りというアップサイクルを計画した。校内に回収ボックスを設置し、協力を呼びかける活動を通して、自己効力感を高めている姿が見られた(図17)。

また、「ポスター」の活動では、伊良部島の環境を守りたいという切実な訴えから「ポイ捨てやっちゃダメ!!」という力強いメッセージを込めたポスターを作成した。児童は、単に事実を伝えるだけでなく、絵や配色を工夫し、見る人の感情に訴えかける表現を選択しており、「相手意識」に基づいた情報の再構成が行われていたことがうかがえる(図18)。

さらに、「ボランティア」の活動では、ごみ拾いの計画や周知ポスター掲示(図19)に加え、ごみ問題に関するアンケート調査(Google フォーム等の活用)を実施した(図20)。自分たちの主観だけでなく、客観的なデータに基づいて課題を再確認しようとする態度は、探究の質を一段と高めた。

本研究において児童は、「人・もの・こと」を視点とした情報の価値付けにおいて、回収した牛乳パック(もの)、アンケートに回答する周囲の人々(人)、ごみ拾いという実践(こと)と多角的に関わった。教科書上の知識であった環境問題が、「自分たちの学校や地域の問題」へと再構築された。これは、『解説総合編』が示す「既存の知識と整理された情報がつながり、考えが明らかになる」プロセスを具現化したものである。

各教科等で身に付けた表現方法の活用においては、図画工作科でのポスター制作スキルや、算数科でのデータ処理、国語科での依頼・対話の技法が、探究の文脈で横断的に活用された。特定の教科の枠を超え、「目的を達成するための手段」として選択・活用したことで、探究活動の質が向上したと推測する。

活動を進める中で、「思ったより牛乳パックが集まらない」「どうしてポイ捨てをすのか」といった新たな問いが児童間で生まれた。表現活動を単なる「発表」で終わらせず、社会に働きかける「実践」としたことで、児童は自らの課題をより鮮明に自覚し、社会の一員としてより良い未来を形成しようとする実効的な態度を身に付けつつある。児童が「自分たちに何ができるか」を真剣に検討し、実社会へアウトプットする過程こそが、知識を「知っている」状態から「活用できる」知恵へと変容させていくものである。ることが重要である。



図17 アップサイクル活動



図18 ポスター作成の様子



図19 周知ポスターの掲示



図20 児童が作成したアンケート

以上のことから、本研究で身につけたい力である、地域のよさや課題を多面的に捉え、自分との関わりを考える力を育む活動について、地域に根ざした体験を基盤に学びのプロセスを意図的に組み込んだ本実践は、児童が課題を多面的に捉え、自己との関わりを深める上で有効であった。児童は、探究のプロセスを繰り返す中で既存の知識を再構築し、地域の課題を「自分たちの問題」として捉え直すことができた。こうした発展的な探究活動の積み重ねにより、児童がふるさとの自然や文化、人々とのつながりに価値を見だし、自らの生き方を主体的に考える活動を通して、ふるさとを想い、豊かに生きる力を育むことができたと考える。

3 調査結果から

本研究における地域素材をいかした体験活動を通じ、「伊良部島のよさ」に関する自由記述のテキストマイニング分析から検証を行った。その結果、検証前は「海」「綺麗」といった、視覚的・感覚的な魅力をあげる記述が中心であった(図 21)。また、検証後は、「サシバ」「伝統行事」「サトウキビ」といった、伊良部島固有のキーワードが顕著に出現していることから、児童の関心が表面的な美しさから、地域の生活や文化に根ざした具体的・探究的な対象へと変容していることがうかがえる(図 22)。

また、「自分が住んでいる地域は好きですか」という設問に対し、肯定的に回答している児童が、検証前 100%から検証後 93.5%へと 6.5%減少した(図 23)。「好きではない」と回答した児童の具体的な理由には、地域の人とのコミュニケーションへの戸惑いがあげられる。これは、総合的な学習の時間における学習活動において、地域住民との関わりを通じ、児童自身が抱くパーソナルスペースへの感覚が、明確化した結果だと考える。

以上のことから、本研究においてアンケート結果の変容を分析すると、児童の意識は「好き」「きれい」といった直感的な段階から「なぜ大切か」「どう守るか」という目的や方法を考える段階へと深まっている。本実践を通して、地域の価値やよさを自己との関わりにおいて捉え、未来へつなげようとする視点が養われたことにより、ふるさとを想い、豊かに生きる力を育むことができたと考える。

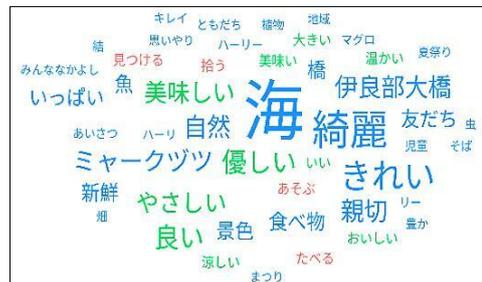


図 21 分析結果(検証前)

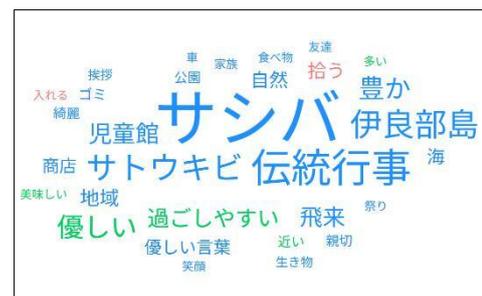


図 22 分析結果(検証後)

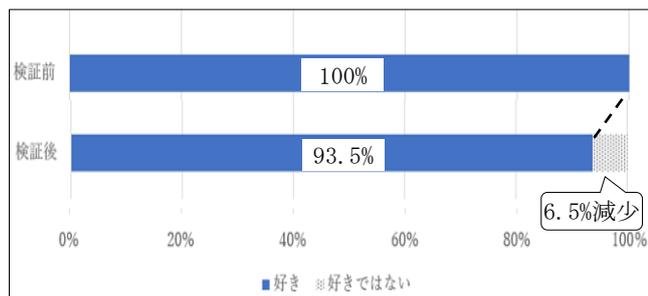


図 23 地域理解における児童の変容

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 伊良部島の自然や文化を教材化し、自己の考えを再構築しながら地域の課題を自分事として捉え直す活動を展開した。これにより、児童が地域のよさや価値を具体的に実感し、ふるさとを想う気持ちを高めることにつながった。
- (2) 学びのプロセスを組み込んだ探究活動において、児童が、地域のよさや課題を多面的に捉えたことにより、自己との関わりを考察する姿が見られた。
- (3) 地域のよさを自己の生き方と関連づけて理解したことで、伝統や自然を守り、未来へつなげようとする主体的な視点が構築された。
- (4) ICTや思考ツールの活用により、思考の可視化と情報の整理・構造化を図ることができた。また、対話を通して多面的に考えを再構築する姿へと変容が見られた。

2 課題

- (1) 探究の過程を通して地域への理解は深まったが、その学びを自己の生き方や具体的な実践へと結び付ける段階には個人差が見られた。地域の諸活動やボランティア等の実践の場において、個々の変容に応じた継続的な支援を行っていく。
- (2) 豊かな自然や文化等の地域素材を教材化する場面において、地域コーディネーターを活用したネットワーク構築を通して、新たな地域教材の開発を継続的にやっていく。
- (3) 探究的な学習の場面において、学びのプロセスが形式的な循環にとどまらないよう、支援の在り方を探究していく。学びのプロセスを深化させる指導の継続へ向け、児童の気づきを価値付ける発問や振り返りの工夫を行っていく。

Ⅸ 参考文献

文部科学省 2025 教育課程部会「論点資料補足資料(探究的な学びの充実に係る関係資料等)」
論点資料⑦「質の高い探究的な学びの実現(情報活用能力との一体的な充実)」

学校法人新渡戸文化学院 2025 「探究のコンパス 学びのデザインを考える 15 のヒント」 明治図書
沖縄県教育委員会・沖縄へき地教育研究連盟 2024 「第 70 回九州へき地・小規模校教育研究大会 第 57 回沖縄県へき地教育研究大会宮古島大会要録」

泰山 裕 2023 「思考ツール×ICT」で実現する探究的な学び 東洋館出版

文部科学省 2021 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」株式会社アイフィス

文部科学省 2018 「小学校学習指導要領総則編・解説編総合的な学習の時間編」 東洋館出版

石井 英真 2018 「授業改善8つのアクション」 東洋館出版

田村 学 黒川晴夫 2013 考えるってこういうことか! 「思考ツール」の授業 小学館

〈参考WEBサイト〉(最終閲覧 2026 年 3 月)

福山市ホームページ

http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/chu-johoku/revolution_actionplan/syutaiteki_manabi02/5_shidouan_s28/54.pdf

荒川区立第三峡田小学校

https://www.aen.arakawa.tokyo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/013/055/4444.pdf